

画鬼 河鍋暁斎 x 鬼才 松浦武四郎

静嘉堂@丸の内（明治生命館）24.04.13～06.09

絵師「河鍋暁斎」（1831～89）と探検家で好古家、書術家、北海道の名付け親である「松浦武四郎」（1818～88）は、幕末から明治期を生きたマルチタレントで、二人の交流は明治初期からあって、「武四郎」は愛玩品を集めた書物「撥雲余興（はつうんよきょう）」などの挿絵を「暁斎」らに依頼している。

本展は、「静嘉堂文庫竣工 100 年特別展」として開催される催事で、「武四郎涅槃図」とそこに描かれた「大首飾り」をはじめとした「武四郎」愛玩の品々を同じ空間で展示して立体的に再現している。更に、「武四郎」の親友「川喜多石水」（1822～79）と実業家・陶芸家の「川喜田半泥子」（1878～1963）や「岩崎小彌太」（1879～1945）との縁を紹介している。



河鍋暁斎《武四郎涅槃（ねはん）図》1886年 重要文化財 152.6 x 84.2cm

本作は、「暁斎」が親交のあった「武四郎」に生前釈迦の涅槃図になぞらえて5年もかけて描いてもらったとされ、中央の松の木の下で昼寝をしているような自分、足元には泣出す妻、天空には浮気世絵から抜け出した美女たちが配置されている奇妙な図である。

この「涅槃図」は、釈迦の涅槃すなわち入滅（死）の情景を表した図で、日本では平安時代以降に制作されて、鎌倉時代を中心に大小多数の遺品が残されている。



河鍋暁斎 《地獄極楽めぐり図》 1869～72年 左



河鍋暁斎 《野見宿禰 (のみのすくね)》 右 宿禰は、土師氏の祖として『日本書紀』などに登場する古墳時代の豪族である。